

2013年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告

春日 由美
宮内 孝一
古賀 隆一
黒川 久美
内田 芳夫

はじめに

南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターではこれまで、「子育て支援室」「チャレンジ運動教室」「あそびの教室」などの活動を行ってきた（春日ら，2011；黒川，2011；春日，2011；春日ら，2012；春日，2012；春日ら，2013；春日，2013；宮内，2013）。「子育て支援室」は学部教員（臨床心理士）が地域の子どもや子育てに関する相談を受ける活動である。「チャレンジ運動教室」は体育が専門の学部教員と学生ボランティアによる活動で、運動の苦手な子どもたちと保護者に運動遊びを体験してもらう活動である。「あそびの教室」は美術が専門の学部教員と学生ボランティアによる活動で、地域の子どもと保護者を対象にした工作遊びを体験してもらう活動である。これら3つの活動は、子育て支援センター開設当初から毎年継続している活動であり、子育て支援センターの柱となる活動と言える。そしてこれらの活動は教員が自分の専門性を活かして地域貢献する活動であり、そこに学生がボランティアで参加することで、地域貢献だけでなく、学生たちの学びの場にもなっている。本報告では、以下に2013年の「人間発達学部附属子育て支援センター」の活動について報告する。

1. 子育て支援室

子育て支援室では、2012年までと同様に、大学の地域貢献を目的に子どもに関する相談業務を行った。相談内容は①子育てについて（子育てに自信がない、イライラしたり不安になる等）、②子ども自身について（不安が強い、学校や園に行きたがらない等）、③親子関係について（子ども

が言うことを聞かない、何を考えているか分からない等）とした。子どもの年齢は限定せず、また保護者のみの相談や、教員や保育士の相談も受け付けた。スタッフは人間発達学部教員1名（臨床心理士）である。相談は完全予約制で、1月～3月は毎週火曜日10時～12時、4月～12月は毎週月曜日の13時から17時で行った。受理面接の予約は、都城キャンパスの事務部で電話を受け、その後担当教員が申込みの受付をし、受理面接日を調整するシステムである。また相談継続中のケースにおいて、必要に応じて教員が学校に出向いて、ケース会議を行っている。なお、本学部には2011年4月より障害児心理学専門の教員1名が配置され、ケース会議にはその教員も参加している。

毎週、継続中のケースや新規のケースにより、ほとんど予約は埋まっている状況であった。開設以来、相談の予約が多く、これまで新規の予約を受けることができない時期も多かったことから、今年度は広報活動を行わなかった。2013年1月から12月の相談業務に関する統計資料および今後の課題は別にまとめる（春日，2014）。

2. チャレンジ運動教室

(1) ねらい

近年の「都市化による遊び場の減少」「少子化による遊び仲間の減少」そしてテレビゲームやコンピュータゲームなどの「子どもの遊びの変化」などにより、子どもが身体を思い切り動かして遊ぶ機会は、減少の一途をたどっている。そのため、「遊ぶ楽しさを味わっていない子ども」「運動に苦手意識をもっている子ども」「動きの発達が未熟な子ども」の増加が問題となっている。

そこで、これらの問題解決の一助として、2010年より「チャレンジ運動教室」を開催した。この教室は、運動が苦手な子どもを対象とし、その保護者も参加することが条件となっており、昨年度までに540名が参加している。

保護者、子どものそれぞれのねらいは、次のとおりである。

- ・保護者：子どもと一緒に「運動遊び」を楽しみながら、子どもの心身の発育発達の様子を観察したり、それぞれの動きの指導法を身に付けたりする。そして、この教室をきっかけに家庭生活の中で、「運動遊び」を楽しむ時間を積極的に設定して、子どもの心身の発達を促そうとする態度を育てる。
- ・子ども：「運動遊び」の楽しさやできない動きができる楽しさを味わって、外で思いっ切り遊ぶ意欲と態度を育てる。

(2) 教室の概要

1) 参加者：244名（延べ人数）

- ・幼児（5、6歳）とその保護者 59組
- ・小学校1、2年生とその保護者 70組

2) 実施回数：16回

- ・前期の部 9回（5/25, 6/1, 6/8, 6/15, 6/22, 7/9, 6/29, 7/9, 7/13）
- ・後期の部 7回（10/5, 10/12, 11/2, 11/16, 11/23, 11/30, 12/14）

3) 教室の内容

幼児の部は、走る、跳ぶ、投げる、捕る、支える、回る等の基礎的な動きを取り上げた。親子で道具をつかって遊んだり、まねっこ遊びなどのゲームをしたりしながら、それぞれの動きの感じを身に付けるようにした。

小学校の部は、3年生時から学習する「かけっこ」「器械運動」「ボールゲーム」などの運動につながる動きを取り上げた。親子でやさしい動きから難しい動きへと挑戦できるようなゲームを多く取り入れて、課題とする動きが身につくようにした。

4) 子ども教育学科学生の参加者：210名（延べ人数）

本教室参加を希望する学生が、授業科目「子ども支援地域活動」の一環として、参加した。教室

開始1時間前に、子どもへのかかわり方や運動指導のポイント等についての事前指導を行った。教室が始まると、担当するグループのマネジメントやつまずいている子どもへの支援を行わせた。教室終了時には、学生一人一人の反省や学びを話合う事後指導を行った。学生にとっては、子どもにかかわりながら、子どもの発育発達の違いや、子どもとのコミュニケーションのとり方、そして運動指導法などの多くのことを体験的に学ぶ機会となった。

(3) 今後の課題

- ・参加者募集、参加者決定・連絡、スポーツ保険加入手続き等の事務手続きの効率化をどのように図るか。
- ・運動指導法などの理論と実践を結びつけた学生の学びを充実させるために、授業科目「幼児体育」「体育」とチャレンジ運動教室をどのように関連させるかを検討する。

3. あそびの教室

地域の親子が参加できる支援活動として、2010年から毎年秋に開催してきた「あそびの教室」は、第4回【かぶり物のお面を作ってあそぼう】を企画し、2013年10月26日(土)に開催した。開催場所は本学体育館である。この「あそびの教室」は、子どもを遊ばせるだけのイベントではなく、親子で活動に参加してもらうことで、①家に帰ってからも親子であそぶヒントになるような遊びの提案、②子どもだけでなく親も一緒に遊ぶことで、あそびの楽しさ・大切さを体験してもらうことを目的とした。また準備から当日まで、教員だけでなく学生も参加することで、学生の学びにつながることも目的としている。以下、第4回「遊びの教室」【かぶり物のお面を作って遊ぼう】親子工作について報告する。

(1) スタッフと準備

(a) スタッフ 人間発達学部の教員と学生が参加した。この活動への学生の参加はチャレンジ運動教室同様、授業科目「子ども支援地域活動」の一環としたボランティアである。ボランティア学生の参加：準備期間=22名（詳細は省略）。遊びの教室参加者=16名（氏名は省略）。担当教員（古賀、

黒川、若宮、春日、以上4名)。

(b) **準備** 子どもの遊びの主役である遊具作品等を学生と教員(古賀)が課外時間などに制作した。準備は6月から10月までの間の内、約4カ月間である。教員と学生で、会場に設置、準備する遊具作品は、第1回の発表作品以来、工夫を重ね制作を重ねて来た。段ボールと広告の紙で作った船や魚、樹木、動物(キリン、馬、犬、豚、)昆虫(蟻、カブトムシ等)の作品群である。初期の作品はトンネルや樹木、動かない船や魚であったが、3回目より二輪運搬車(下地にはダンボールの他ベニヤ板を用い強度を高めた上)に、動物や飛行機を仕込み「動く遊具」に発展させた。今回の親子工作のテーマは「かぶり物の制作」で主な事前準備は、風船(直径30センチ程)に新聞紙と広告紙を貼り重ねてベース(下地)を作り準備した。当日参加される方に作品のイメージが理解し易いように、学生に一個ずつ思い思いのサンプル制作をもらった。前回から動く遊具として新たに自在キャスターに加えて、今回はリヤカーに仕込んだ遊具で遊びの範囲を広げる試みをした。また教員が広報、傷害保険の手配、FAXでの参加者の受付事務を行った。

(2) 当日の活動

「あそびの教室」前日の2013年10月25日(金)に、教員と学生で体育館内に段ボールの船、樹木、動物、昆虫、飛行機、等の乗り物遊具などの他、学生が作ったかぶり物の作品を搬入した。

当日は2013年10月26日(土)の午前中9時から12時の間の3時間に、体育館で「あそびの教室」を実施した。参加者は幼児(3歳以上の未就学児)と小学生の親子13組、子どもの数は計16名であった。

工作の内容は①学生と教員で作っておいた素材(風船を利用したかぶり物のお面の下地)素材を準備して作品のベース(下地材)を使用した。②広告の紙や古新聞紙を、2倍に薄めた接着剤(ボンド)を使って貼っていく、所謂張り子の技法である。①②共に教員から説明を行い、学生ボランティアは子どもの遊具遊びのサポートと親子の工作を手伝った。

(3) アンケート結果と今後の課題

回答戴いた方は11名(未回収2名)の保護者である。アンケート項目は1. 楽しかった、2. ためになった、3. 自分(保護者)も楽しかった、4. 家にかえてからも、やってみようと思う、5. 子どものことで、これまで気がつかなかった発見があった、6. また「あそびの教室」に来たい、の6項目である(回答の記号は、A=はい、B=どちらでもない、C=いいえ)。

アンケートの結果は、1は全員A、2はAが10名、Cが1名、3はAが10名、Cが1名、4はAが9名、BとCが各1名。5はAが7名、Bが1名、Cが3名、6はAが10名、Cが1名であった。「1. 楽しかった」は全員「はい」、「6. また『あそびの教室』に来たい」は1件を除き全員が「はい」という回答であり、子どもが自由に使えるダンボール遊具での遊びは参加者には有意義な活動になったと思う。

また自由記述項目では、以下のような回答が寄せられた(文章は要約したものである)。「かぶり物を自分でつくれるとは思わなかった。」「今日はボンドの感触が楽しめた。次の機会も参加したい。」「学生に沢山遊んでもらって良かった。子どもの「描く、作る」の造形教育の話は勉強になった。」「子どもは制作に参加せず遊具で遊んでいた。このような学生との交流を今後も望む。」「親の方がのめり込んで楽しんだ。子どもの発想に驚いた。来年も参加したい。」「子どもの工作が制作過程を大事にすることは分かるが出来あがる方が嬉しいしやりがいがある。」「子どもは段ボール遊具遊びに夢中だった。親が楽しそうに作ってれば寄って来るかと思ったが子どもは工作に関心が無かった(年長児)。」「風船の使い方、ボンドの使い方が参考になった。」

今年のテーマは親子(幼児)を対象にした。これは初回より一貫している。子どもの工作は大人が主体になり援助しないと幼児の参加は難しい。広告紙や新聞紙を使うのは、幼児の遊びで大切な安全性を考えているからである。素材の紙から様々なアイデアやイメージを見出すことが工作の意味であり、親が制作をしている姿を幼児が見ながら少しの参加と遊具あそびに興じる姿をイメージして企画している。工作は本来制作しているそ

のことが“楽しい遊び”であり安易に完成(結果)を求めるべきではない。「完成させた方がやりがいがあるのでは」の意見も聞かれたが、大人の発想に固まることなく、完成という作品(結果)主義に走らない考え方の啓蒙は今後も必要であろう。この活動は遊びを主体とした幼児の参加に重きを置くもの、工作は親が頑張っている創作の姿を見せて欲しいと願うものである。

今後の活動の方向として幾つか活動の提案もあり、今後検討していきたい。今回の活動では、工作との関連から「幼児絵画に関する」質問もあり、並行して説明すべき課題も明らかになった。今後更に改善しながら、よりよい活動を作り上げていきたいと考えている。

まとめ

以上、人間発達学部附属子育て支援センターの活動の3本柱である「子育て支援室」、「チャレンジ運動教室」、「あそびの教室」についての2013年の取り組みを報告してきた。今日の子ども・子育てをめぐる問題や地域の実情について、取り組み中でこそ見えてきたものが多々存在する。それらについて支援センターとして論議を深め、今日の諸課題にこたえていけるよう活動の幅を広げ、更に豊かなものにしていきたいと考える。

今後の課題として5点あげておきたい。

第1に、2013年度は支援センター内に保育士(非常勤パート)1名の配置が実現し、子育て中の親子が日常的に集える「子育てひろば」のような常設の場の開設に向けての第1歩を踏み出すことができた。地域に開かれた、日常的な「子育てひろば」(仮称)の開設にとっては、空間的条件だけでなく人的条件が整えられるかどうかが重要な要件であった。非常勤とはいえ、都城地区内にある子育て支援センターで長年、中心的役割を担ってきたベテラン保育士を確保できた意味は大きい。今年度は、主として環境整備と学生への保育技術の支援を実施してもらった。学生への支援は、学生が今後「子育てひろば」に関わる上で保育技術力を身に付けておくことが必要だと考えたからである。「子育てひろば」への学生の参画は“大学ならでは”という本学部支援センターを特徴づけ

るものの一つになるといえよう。次年度は、日常的な「子育てひろば」の開設に向けての具体的な計画づくり、そこでの学生の関わりの可能性の追求、並びにトライアルの実施を支援センター保育士を軸に取り組んでいきたい。

第2に、今年度より特別支援教育教員養成が本学部においてもスタートし、教員体制も充実したものになった。そこで、子育て支援センターにおいても、特別な支援を必要とする子どもたちへの何らかの取り組みができないかどうか、特別支援教育の教員の協力も得ながら検討していきたい。第3に、3本柱の活動いずれにおいても、一部教員に実務面で大きな負担をかけながら実施されている。実務担当者の配置が望まれる。そうすることで、教員は活動に関して、内容や質の一層の向上のために力を注ぐことができるといえる。

第4に、支援センターの諸活動への学生の参画と、教育・保育実習や大学での授業・ゼミ、あるいは「夢かなⅡ」での表現活動等とを有機的に関連させるしくみづくりを追求していきたい。

第5に、都城市・三股町地域にある4か所の子育て支援センターの自主的な連絡組織である「求10ネットワーク」の要請を受けて、今年度も本学を会場に親への子育て講演会の講師を教員(黒川)が引き受けた。また「子育て家庭支援論」(黒川担当)の授業の一環として、子育て支援センターの協力を得て、3か所の支援センターへの学生の「実地研修」を行うことができた。こうした取り組みの実績をつくりつつ、地域の子育て支援センターとの連携のあり方を探っていきたい。

引用文献

- 春日由美・黒川久美・宮内孝・古賀隆一(2011) 2010年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 1, 89-92.
 春日由美(2011) 2009年・2010年南九州大学における子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 1, 93-95.
 春日由美(2012) 2011年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 2, 220-222.

- 春日由美・黒川久美・宮内孝・古賀隆一・内田芳夫・矢口裕康・若宮邦彦（2012）2011年人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 2, 215-219.
- 春日由美・宮内孝・古賀隆一・黒川久美・内田芳夫（2013）2012年度人間発達学部附属子育て支援センター活動報告 南九州大学人間発達研究, 3, 123-126.
- 春日由美（2013）2012年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 3, 119-121.
- 黒川久美（2011）「わくわくおやこ村」に関する報告－地域との連携による子育て支援活動－ 南九州大学人間発達研究, 1, 97-100.
- 宮内孝（2013）運動が苦手な子どもを対象とした「チャレンジ運動教室」の3年間の活動報告―捕球技能を高める指導事例を取り上げて― 南九州大学人間発達研究, 3, 127-134.
- 春日由美（2014）2013年南九州大学人間発達学部附属子育て支援センターにおける子育て支援としての子どもに関する相談業務報告 南九州大学人間発達研究, 4, 134-136.